

『古事記』を書名に掲げ再話された日本の神話

―『日本神典 古事記噺』への考察―

市瀬 雅之

はじめに

明治期の児童文学に再話された日本の神話は、一八八六年〔明治十九〕にチエンバレンの「ちりめん本」が、『八頭の大蛇』『因幡の白兔』『玉の井』を海外に紹介しはじめる。日本国内においては後を追うように、巖谷小波の「御伽草子」（一八九四〜九六年 博文館）が『八頭の大蛇』『兎と鰐』を収めている。『古事記』等から、部分的に再話された作品は、昔話の一つのように扱われはじめる。

一九一〇年〔明治四三〕になると、書名に『古事記』を掲げた渋川柳次郎（玄耳）（一）の『日本神典 古事記噺』精美堂が刊行される（以下「渋川『古事記噺』」と称す）。

本稿では、刊行された経緯と内容を検証する。書名に掲げた「古事記」が持つ意味を確認する。

一、刊行の経緯

渋川『古事記噺』の「はしがき」には、以下のように記されている。

古事記は日本の神典なり、神代よりして語り継ぎ言ひつぎ来れる事共を正しき伝へのまゝに記し収めたる宝庫なり。特に我国の歴史、文学の淵源たる第一の古典たるのみならず、世界に於て亦最も尊き史籍の一なりとす。

方今、欧米の破壊的、廢類的思潮滔々として寄せ来り、神国的美風之が為に蕩尽されんとする時に当り、我国体の精華、民性の特質、万邦に超絶せる所以を知らしめ、以て此の濁浪より済はんもの、是れ是の古事記

なり。惜むらくは古事記の文高古にして児童の之を解せんこと難し。

『本書』は、古事記中の説話の殆ど全部を取つて平易なる口語に訳し、且つ日本書紀以下の古書を参酌し、又た著者の意匠を以て多少の潤色を加へたり。

此の興味ある『古事記噺』を読まん児童は女々しき將た自暴自棄なる現代の悪病に染むことなく、雄々しく晴れやかなる、神代ながらの真心を受け継ぎて、更に新しき日本に活動することを得べきなり。

明治四十三年八月

渋川玄耳

『古事記』が神代から語り続けられてきた日本の正書とされ、日本の歴史と文学の淵源と位置づけられる。世界の中でも重要な歴史書のひとつであると強調される。

不思議なのは、書名に『古事記』を掲げながら、内容に『日本書紀』等を含むと記されていることである。その理由が問われよう。

「はしがき」の後には、「くりごと」として、平易な文章で次のように記される。

一、吾家の小児等に、我国の古い尊い伝説を教へてやらうと思つて、昨秋より稿を起したが、書始めて見れば其から其へ手が拡がつて、急に収りが付きさうもない、其中に子どもはずんぐ／＼大きくなつてしまふ。とても完成を俟つて居られないし、少しく時勢に感ずる所もあるので、取敢へず、稿本の一部を出版することとした。引續いて工夫をして居るから、何度も修正増補を加へて行く積りである。

二、此書は主として『古事記』に依つたので、『古事記』の肝要な話は

殆ど此に尽きて居る。処々に『日本書紀』『古風土記』などに依つて増減した所もあるが、子供相手の本だから、一々出処も示さず、取捨の理由も挙げない。

三、子供に面白がらせようとて、空想的な敷衍に過ぎた所もある、未定稿を俄に印刷に付したので、書き方も一致して居ない。『古事記』の忠実なる訳文は別に出す筈である。

四、本書はつまり吾等が幼時家庭や村塾で口から耳に伝へられて居る所のものを、さういふ機会の乏しくなつた今の忙しい父兄と子弟との為にと書いたのである。想い出すは故郷の故家。櫓の火に光る土間の味噌醬油甕を指さして『あゝいふ風に八個の酒甕を並べて其陰に素戔鳴尊はちつと待つて、お出になつた……』と大蛇退治の話に、小さい拳を握つた炉辺の団欒も、もう三十余年の昔となつて、父も母も黄泉の人となられ、唯一人の兄は、古の新羅の国に隔つて逢ふことも難い。併し吾六人の子の父と為つた今にも、彼の頃に注ぎ込まれた或物が残つて居る様な氣がして。

明治四十三年の秋 東京にて 老童 玄耳

一には、記したのが日本の「伝説」であるとする。時勢が戦争への傾斜を強めると、「国史」或いは「史実」等と記されるようになる(2)。そこに至る前の姿を残す。

再版については、

渋川玄耳『日本神典 古事記噺』誠文堂書店 一九二〇年〔大正九〕

が認められる(3)。

二には『日本書紀』や『風土記』を交えて再話していることが繰り返される。三のように、子どもを面白がらせようと空想に過ぎたり、やさしく書き改めていることを認めても、他書を誘引する直接の理由にはならない。

『古事記』の訳文は、

渋川柳次郎『日本神典 三体古事記 原文古訓俗語』有楽社 一九一一年〔明治四十四〕三月

渋川柳次郎『三体古事記 日本神典』(再版) 正確堂 一九一五年〔大

正四〕一月

渋川玄耳原著 誠文堂新光社編集部補訂『三体古事記』誠文堂新光社編輯部補訂誠文堂新光社 一九四〇年〔昭和十五〕九月

と、別途刊行・再版・補訂されている(以下、「渋川『三体古事記』」と称す)。「古事記」を知らなかったわけではない。四には、本来、家庭や塾で口から耳に伝へられるはずの内容を記したとある。言葉どおりなら、子どもの頃に聞かされた神話は、『古事記』の内容だけに限るまい。『日本書紀』や『風土記』等の内容を合わせ持つ可能性が考えられる。「想い出すは故郷の故家」と、子どもの頃の記憶が再話の根幹を支える。『古事記』ばかりにこだわらない執筆姿勢が許容されよう。こうした推察が許されるなら、書名に掲げられた「古事記」は、再話した主たる文献名であり、内容の古さを象徴する表現程度に解される。

二、神名表記の特徴

渋川『古事記噺』は、『古事記』上巻から下巻の推古天皇代までを再話している。ここではその中から、上巻に相当する神話部分の目次のみを掲げておく。

世界の始

天と地 高天原 漂へる国 天御中主命 天つ神 造化三神 男神
女神 天の浮橋 天の瓊矛 国生み 大八島 大日本 秋津洲
神々の降誕

海陸山川草木の神々 風の神 火の神 ①伊弉冉尊火傷 死と穢れ
の始まり 涙の中からも神 刀からも神

黄泉国

ゆつつま櫛の男柱 一つ火 八雷神 黄泉軍の追撃 小便の川 桃
の実 千引の大岩 二神の離別 生死の数

日神月神の誕生

橘の小門の禊 禍の神 幸の神 ②天照大神、月読命、③素戔嗚尊
の誕生 三神の管轄 天上 海外諸国

日月の不和

日月並び輝く 日神の命令 月神の天降り 保食神の歓迎 月神の
乱暴 斬殺 天熊大人の慰問 五穀牛馬の発生 高天原の試作

素戔嗚尊

泣き神 八握髻 青山枯山 ④伊弉諾命の憤怒 素戔嗚尊と根の国

素戔嗚命の昇天 天照大神の逆撃

子生み競争

天の安河 誓ひの子生み 八坂勾珠と十握剣 天の真名井 素戔嗚
命の勝利 天地闇黒

天の岩戸

八百万神の議会 思兼命 宇受売命 八坂曲玉 八咫鏡 手力雄命
天照大神の出現 素戔嗚命の放逐

八俣大蛇

足名椎 手名椎 櫛名田姫 八瓊折の酒 大蛇を斬る 天の村雲の

剣 八雲立の歌

朝鮮

素戔嗚命の渡海 宝の国 五十猛命 鬚髯 胸毛 尻毛 眉毛 八

十木種 浮宝

国引

臣角命 国の余り 三縑の大綱 国来々々 縫ひ足し 朝鮮合併

裸兎

八十神 八上姫 大国主命と大きな袋 因幡の白兎 眷族競べ 鰐
の飛石

八十神の難

赤猪の奸謀 大国主命の惨死 復活 きさ貝姫 うむ貝姫 木の股
より脱る

鼠と鏑矢

須世理姫 蛇の室 蜂の室 領布 内はほらく 外はすぶすぶ
生太刀 生弓矢 天の沼琴 八十神の滅亡 木俣神

小さき神

大国主命の威徳 波の穂に現はれたる小さき神 少彦名命 物識り
の蝦蟇と案山子 二神の恩恵 医薬禁厭産業 南洋の経略

雉の使

皇統定まる 天孫降臨 天の安河原の神集ひ ⑤天帆日命、⑥天若
彦の派遣 雉子名鳴女の使ひ 下照姫 返し矢 死人の誤り 高彦

根命

国譲り

武雷命、鳥船命 刃の上に胡坐 事代主命 ⑦建御方命の力競べ
諏訪の湖 大国主命の退隠 星の神吞々背男 蘆原中つ国の平定

天孫降臨

天壤無窮 万世一系 三種の神器 天の八衢 猿田彦命 天宇受売
命 高千穂峯

人の寿

⑧瓊々杵尊 ⑨木花咲耶姫 岩長姫 火の産屋 火照命 ⑩火折命
海幸山幸

火照命 火折命(⑪彦火々出見命) 鹽土翁 釣鈎と弓矢の交換 海

神の宮 潮満珠 潮乾珠 豊玉姫 八尋の大鰐

一覧して気づくことは、番号を付した箇所に『古事記』とは異なる神名表記が用いられていることであろう(4)。①～④⑧⑩は『日本書紀』の表記と一致する。しかし⑤⑦は『日本書紀』とも異なる。

『古事記』の原文と訓読と訳文が記された渋川『三体古事記』には、同箇所が次のように記されている。

原文	訓読文	訳文
①伊邪那美	伊邪那美	伊弉冉
②天照大御(神)	天照大御(神)	天照大(神)
③須佐之男	須佐之男	素戔鳴
④伊邪那岐	伊邪那岐	伊弉諾
⑤天穗比	天穗比	天穗比
⑥天若日子	天若日子	天若彦
⑦建御名方	建御名方	建御名方
⑧邇邇芸	邇邇芸	邇邇芸
⑨木花之佐久夜毘売	木花之佐久夜毘売	木色咲耶媛
⑩火遠理	火遠理	火遠理
⑪穗穗手見	穗穗手見	穗穗手見

原文と訓読には『古事記』の文字遣いを認めながら、①②③④⑥⑨の訳文には、傍線で示すように異なる表記が示される。①②③④⑥は渋川『古事記』と一致するが、⑤⑦⑧には『古事記』の文字遣いが優先される。併記される原文と訓読文に準じている様子が認められる。ただし⑧には、『古事記』はもちろん、渋川『古事記』とも『日本書紀』の表記とも異なる文字遣いが認められる。訳文の神名表記において渋川は、『古事記』に忠実であろう

とはしていない。「くりごと」三のように「未定稿」であるが故のことかもしれないが、渋川が慣れ親しんでいた文字遣い、或いは神名の意味が分かるような漢字遣いを優先するような姿勢が、痕跡として認められる。

三、『日本書紀』等の援用

「世界の始」の冒頭は、次のようにはじまる。

世界の始は、天も無く、地も無く、際も涯も無く、唯とろりとした大虚であつた。何時とはなしに、其中から、軽く清んだものが、棚びき騰つて天と為つた。其高天原に、まづ天御中主命といふ神がお生に為つた。次に高産霊命、次に神産霊命、之を造化三神と申す。

さて、重く濁つたものは、次第く沈み澱んで、遂に此の世界と為るのであるが、なか／＼容易に堅まらない。何十万年が間、国稚く地稚く、ふわ／＼として漂ふ海月の如く、どろ／＼として水に膏の浮いた様であつた。(以下略)

渋川『三体古事記』の訳文が『古事記』の内容を優先して、

(一) 天地の始、高天の原にお生に為つた神の御名は、天の御中主神。次に、高皇産霊の神、次に、神皇産霊の神此の三神は、独り神にして、隠身で在らせられた。

世界はまだ稚くして堅まらず、とろりとして浮脂の如く、ふわ／＼海月の様に漂へる時に、其中から葦の芽の萌え騰る様に、お生に為つたのが、美葦芽彦舅の神。次に、天の常立の神、此の二神も、独身の隠身であらせられた。

以上、五神を別天つ神といふ。

と記すのに比べると、「世界の始」と「高天原」との間に点線で示すような説明が加えられていることが留意される。唐突に「高天原」からはじまれば、それらが何であるのかに説明を要する。『古事記』は、存在や出来事を自明

とする記述が少なくない。読者に疑問を懐かせない配慮が求められる。『日本書紀』第一段正文の冒頭に着目すると、

古に天地未だ割れず、陰陽分れず、渾沌にして鶏子の如く、溟滓にして牙を含めり。其の清陽なる者は、薄靡きて天と為り、重濁なる者は、淹滞りて地に為るに及びて、精妙の合搏すること易く、重濁の凝竭すること難し。故、天先づ成りて地後に定まる。然して後に神聖其の中に生れり。

とある。古は、天と地がまだ分かれておらず、陰の気と陽の気も別れていなかった。混沌として鶏の卵のごとく、ほの暗く見分けにくいけれども、物事が生まれようとする兆しを含んでいた。澄んで明るい気が薄くたなびいて天となり、重く濁った気が停滞し地となるに従って、清く明るい気はまるく集まりやすいが、重く濁った気は凝り固まるのが難しかった。そのために、天が先にできあがり、地は遅れて定まる。こうして後に、神がその中に生まれたとあり、「世界の始」が記す点線部分と類似する。

「黄泉国」ではイザナキ（本文中では神名に複数ある漢字表記をカタカナで統一する）が逃げ出す場面には「小便の川」が、

それで、いくらか逃げ延ばれたけれど、又忽ちに追付いたので、此度は前を捲つて、醜女共に向かつて、じやア〜と放ると、小便は流れて一條の大川と為つた。醜女共が、此大川を渡り兼ねてためらふ中に、どんぐ〜走つて、もう好からうと振り返れば、今度は火雷、土雷、黒雷、大雷の面々が、総勢千五百の軍勢を引連れ、どろ〜どつと颶風の襲ふが如く、瞬くうちに追ひ迫つて来る。

と記す。『古事記』にはなく、渋川『三体古事記』にも認められない。『日本書紀』第五段一書第六に、

一に云はく、伊弉諾尊乃ち大樹に向ひ放屢したまふ。此即ち巨川に化成

る。泉津日狭い女其の水を渡らむとする間に、伊弉諾尊已に泉津平坂に至りたまふといふ。

とある内容と合致する。おしつこが大川を生み出すところに話の面白さを認め、イザナキが逃げる様子にユーモアを交えている。

黄泉の国から戻ったイザナキが禊ぎをする中に誕生したアマテラスとツクヨミに、渋川『三体古事記』は『古事記』と同様、『汝は高天原を治めよ』『夜の国を治めよ』と命じる。ツクヨミが夜の国を治めることに着目すれば、アマテラスは「昼」を治めてもよさそうなのだが、『古事記』はそれを認めない。しかし渋川『古事記』は、「日神月神の誕生」と題して、

就中天照大神は一際立つて気高く、天晴れ天地の主宰として立たせ玉ふべき御威徳の光が輝いて居る。此はこの下界に留めおく可き方でないと思召して伊弉諾命は御自身の玉飾を脱して、ゆらりと此女神の首に懸けさせられる。玉は相触れて琅々と鳴る。

『汝は是より高天原を治めて、天地の裏表、あらゆる世界万国を照し玉へ』

と言つて、其頃は天地分れてまだ久しく経たぬ時とて、上下遠くも無かつたので、直ぐに天の御柱を以つて日の神を高天原に送りあげて、次に月読命に、

『汝は姉君を助けて天上を照らせ』

と記す。アマテラスに「高天原」を治めさせながら日神であると位置づけ、ツクヨミとの関係を整えている。アマテラスを「日神」としているのは、『日本書紀』神代上第五段正文の内容と一致する。

「日月の不和」には、

此より後暫時は、日月相配び光り輝いて、天上天下を照らしてお在に為つたが、或時、日の神は月の神に、

『下界葦原の中国には、保食神といふ不思議の業を為す神が居る由、卿

天降つて其様子を見て参れ』

月読命は此勅せに依つて、幾重の雲霧を踏み分け潜り脱けて、此の日本に降りつき、保食神の処を訪ねて行くと、庭に一本の好く繁つた桂の大木があつた。月読命は其桂の樹に倚り立つて暫時様子を窺つて、さて案内を乞うた。（此木の在つた所は山城国桂の里）

保食神は、此の光清しい天上の珍客を喜び迎へて、十分の馳走を為ようと、先づ野原に向つて、ほうつと氣息を吐けば、其口より水晶の粒のような真白な米がたばしつて、野一面に充ち満ちた。更に、海に向つてふうつと吹けば、口の中より鯛、比目魚、鰻、鯖、大小種々の魚が、ぴん／＼撥ね出でる、今度は山に向かつて吐く息の中から、ばら／＼駆け出すのは、『毛の龜物、毛の柔物』とて大小の獣であつた。尚ほ繼いで、保食神が吐く氣息の下から、芋や、大根、海苔、昆布、其外有らゆる食物が出て来る。其れを百千種の旨い料理に拵らへて、月読命の前に供えたのである。

然るに月読命は、此の折角の好意を無にして、

『何だ穢らはしい、此んな物が食はれるか、貴様が口から吐き出したものをッ』

忿然として膳も机も蹴散らかし、腰の劔を抜放つて、一打に保食神を斬り倒し、其のまゝ颯と雲に飛び乗つて高天原に帰り上つた。

さて右の次第を日の神に報告されると、

『卿は何といふ悪いことをする奴ぞ。若し氣に入らなければ食べないまでの事、保食神の折角の好意を無にした上に、斬つて了ふとは乱暴極まる。其様な悪いものと一所に居る事は嫌だ。二度と見るのも穢れだ』と痛くお叱りに為つた。

是まで日月相並んでお在に為つたが、是よりして後、長く昼と夜とに別れて、日の神のお姿が見えなくなれば、月の神は決して空に現は

れぬ事に為つて了つた。

と、昼夜を分かつ話が記されている。これは続いて、

慈悲深い天照大神は、保食神の横死を憫んで、天熊大人といふ神をば見舞いにお遣はしに為つた。天熊大人は仰せのまゝに天降つて、保食神の処に到り、介抱をして見たけれども、死んで已に久しい事で、最早助けようがない。其死骸の頭の処には牛と馬とが生きて居る、眉の上には蚕が生きて居る。額の上には粟、眼の中に稗、腹の中に稻、臍の下に麦、豆などが生きて居る。天熊大人は悉く此等の物を採つて天上に帰つた。天照大神は之を見て、

『おゝ、此は皆世界の人民共が命を継ぐべきべき宝ぢや』

とお賞めに為つて、神々をして牛馬を使つて田畑を作り、穀物を播いて農業を始めさせ、又蚕を飼つて糸取る道を習はせられた。

と記される五穀の起源を合わせて、『日本書紀』神代上第五段一書第十一からの援用が認められる。傍線部には、『山城名勝志』卷十「桂」の条に、

或云、山城風土記云。月読尊受天照大神ノ勅一降ニ于豊葦原中国。到ニ

于保食神許一、時有一ノ湯津ノ桂樹一。月読尊乃倚其樹一立之、其樹所

レ有今号ニ桂ノ里一、

と記される内容が加えられている(5)。

「八俣大蛇」では、大蛇の腹から見つかる劔を、

愈々奇怪と思召して上皮を切り剥げば、中から明昇々たる一振の劔が現はれた。此が即ち村雲の劔で、後に日本武尊が東征の後、草薙の劔と改称になった我が皇室の三種の神器の一つである。

と記す。渋川『三体古事記』は『古事記』と同様に、

怪と思して、御刀の端もて、刺割き見ししかば、都牟刈太刀あり。故、

此の大刀を取らして、異物ぞと思して、天照大神に白上げたまひき。是は草薙大刀なり。

と訓読するが、訳文では、

怪しく思召して、其の処を割いて御覧あると鋭い太刀が現れた。不思議の物と思召して、此名剣は天照大神に申して献上された、是が、後世に草薙の剣と申すのである。

と、「都牟刈太刀」に触れない。原文表記に異説があり(6)、解釈が難しいためと考えられる。「村雲の剣」は、『日本書紀』神代上第八段正文が、

此所謂草薙剣なり。草薙剣、此には俱婆那伎能都留伎と云ふ。一書に云

はく、本の名は天叢雲剣。蓋し大蛇居る上に、常に雲氣有り。故以ちて、名くるか。日本武皇子に至りて、名を改めて草薙剣と曰ふといふ。

と剣名の理由も記す。読者にわかりやすい剣名が選ばれている。

「海幸山幸」でも、ホオリ(山幸)が海岸で途方に暮れていると現れた「塩土の神」が、

目無籠という籠に火折命を入れるて、しっかり蓋をしてして、そうつと海の中に卸すと、籠はずぶ／＼底の方に沈んで行く。

おやッ！と思召す中に、どう／＼と何かに衝突かつて止まってしまった。

何うしたのかと火折命は籠の中から出で見ると、水も何もない綺麗な砂浜の中に路が一筋あつて、遠くに立派な城のようなものが見えてゐる。

と記す内容は、『日本書紀』第十段正文に近い。『古事記』の同箇所では、シオツチがホオリ(山幸)を「虚空津日高」と呼ぶのだが、説明されていない。それを避けているようにも見える。

洪川『古事記嚙』は、天地初発から、推古天皇代までを再話する点において、『古事記』を再話しようとしている。ただし内容の説明が求められるところに、『日本書紀』や『播磨国風土記』逸文とされる記述等が援用されている。神話をわかりやすくする方法として用いられていることを確かめることができる。

四、海外に向けられる関心

洪川『古事記嚙』には、前述したほかにも海外への関心が強く示される。例えば「世界の始」は、

(前略) 日本の事を大八島国といふのである、其次に日本の周囲に小さい島々を生みつけ、それから段々と、亜細亜、亜弗利加、欧羅巴、南北亜米利加、濠太利亜、其外世界のあらゆる国々島々をお生みに為つて、それ／＼程よく修り固めさせられたのである。

と、アフリカやヨーロッパ、アメリカやオーストラリア等を含んだ世界の誕生を記す。洪川『三体古事記』にはここまでの訳文が認められない。

『古事記』では、イザナキがスサノオに「海原を治らせ」と命じるのに対して、「日神月神の誕生」は『汝は此の世界各国を治めよ』と表現する。「朝鮮」には更に、

素戔鳴尊は出雲国須賀の都に在つて、日本の北側の国々を治め玉ひしが、初め、父伊弉諾命より仰せつけられたる通り、海外の国々をも治めようと思召して、御子五十猛命を随れて船に乗つて西へ西へと風に任せて、新羅の国に着かせられた。

と、統治の様子が記されている。ここには、『日本書紀』の神代上第八段一書第四に、

一書に曰はく、素戔鳴尊の所業無状し。故、諸神、科するに千座置戸を以ちてして、遂に逐ふ。是の時に素戔鳴尊、其の子五十猛神を帥ゐ、新羅国に降り至り、曾尸茂梨の処に居す。

とある内容が援用されている。ただし留まっていはいない。

乃ち興言して曰はく、「此の地は吾居らまく欲せず」とのたまひ、遂に埴土を以ちて舟を作り、乗りて東に渡り、出雲国の簸の川上に在る鳥上峰に到ります。

と、出雲国の「簸の川上に在る鳥上峰」に降り立つように記されている。

これを、

其処等の荒神ども悉く切り従へ、牛頭城（今の朝鮮江原道春川付近）といふ処に都を建て、朝鮮満州其他の国々を御支配なされた。

と朝鮮半島を統治する話に変えている。

船材として、素戔鳴尊が杉や檜を増やす話は、『日本書紀』の神代上第八段一書第五に、

一書に曰はく、素戔鳴尊の曰はく、「韓郷の島は、是、金銀有り。若使吾が児の御らす国に、浮宝有らずは、是佳からじ」とのたまひふ。

乃ち鬚髯を抜き散ちたまへば、杉に成る。又胸毛を抜き散ちたまへば、是檜に成る。尻毛は是椋に成る。眉毛は是櫟樟に成る。已にして其の用あるべきを定めたまひて、乃ち称へて曰はく、「杉と櫟樟

と、此の両樹は、以ちて浮宝にすべし。檜は、以ちて瑞宮の材にすべし。椋は、以ちて頭見蒼生の奥津棄戸に将ち臥さむ具にすべし。夫れ

噉ふべき八十木種は、皆能く播き生しつ」とのたまふ。（以下略）

と記す内容が用いられている。渋川『古事記断』はその後に、

其後素戔鳴命は、朝鮮の支配を御子方に任せて、御自身は出雲国にお歸りに為つた（以下略）

とする。引き続き記される「国引き」には、『出雲国風土記』の「意宇郡条」の存在が知られるのだが、渋川『古事記断』はそこに、

そこで、海岸の巖の上に立つて、何処か「国の余り」は無いかと、遙に西の方を御覧になると漫々たる大海を隔てて、彼方に新羅の国（今の朝鮮）が見える。

『おゝ有るく、新羅の岬に国の余りがある。あれを引き寄せて、此の国に縫ひ合せよう』

と、臣角命は金剛力を頭はして、其の新羅の国の出鼻をパクリと鋤取つて、ザクリと衝き放して、ズバリと切り分けて、さて三縋の大綱を

打掛けて、其国の片ひ結びつけエイヤ／＼と手繰り寄せ、そろり／＼と引き寄せて『国来々々、此処まで来い』と、とう／＼引きつけて縫ひ合はされたのが、古津から杵築の岬の辺である。此時国引きの綱から

と、傍線で示すように、神話には見られない地名を加筆する。それは、とう／＼今日の出雲国がすっかり出来上つたのである。

神代より幾千万年を経て明治四十三年に為つて、彼の千切り残りの朝鮮の全部が、遂に悉く我日本に引かれて了ふことに為つた。まだ／＼世界には、我日本が智仁勇、三より綱打掛けて引寄すべき国がいくらかも有るであらう。

と波線のように、「明治四十三年」（一九一〇）を現在とする理解までが表現される。当時の社会情勢が、渋川『古事記断』に「朝鮮」と「国引き」の話を組み入れさせている。

海外への視線は「小さき神」にも、オオクニヌシが、

天高原に使を上せて神産靈神に伺はせると、『如何にも其は吾子である、吾が生んだ子総て千五百神あつた中で、此の子が一番いたずらな子であつて、吾が指の俣から漏け落ちて一時行方知れずになつたが、其後海外に渡つて諸国を治めて居るといふことが分つた。

と、スクナビコナが海外に渡つて諸国を治めていると記し、オオクニヌシとの国づくりが一段落すると、その先に、

最早、日本も治まつたので、少彦名命は、復例の小さい船に乗つて、出雲国を漕ぎ出し、南洋の方に渡つて数々の島を拓かれたといふ。其島々には好く日本人に肖た人間が今も住まつて居る。

と、南洋の島々まで拓いたとしている。

「明治四十三年」（一九一〇）の日本情勢を映すように、物語の内容が変更されているところに大きな特徴が認められる（7）。

おわりに

渋川『古事記断』は、書名に『古事記』を冠しているが、『日本書紀』や『風土記』逸文とされる記事内容を含み込んでいるところに大きな特徴が認められる。その理由を辿ってみると、渋川が子どもの頃に聞かされたという神話には、『古事記』『日本書紀』『風土記』等の区別がなかった。大人になってから混在していることを知れば、『古事記』に他書の内容を加えることに抵抗はあるまい。書名に掲げられた「古事記」は、結果的に再話した内容の古さを象徴する表現となっている。

目次以降に記される神名表記には、『古事記』に準じる再話意識が乏しい。『日本書紀』が使用する表記の他に、渋川独自の表記等が認められる。「くりごと」三に記されるように、「未定稿」であるが故のことかもしれないが、渋川が慣れ親しんでいた文字遣い、或いは神名の意味が分かるような漢字遣いを優先する傾向が認められる。

渋川『古事記断』は、『古事記』上巻から下巻の推古天皇条までを記す点において、『古事記』を再話しようとしているのだが、説明が求められる箇所には『日本書紀』や『播磨国風土記』逸文とされる記述等を援用する傾向がある。ユーモラスでより豊かな神話に仕上げることが目指されている。

再話の中には、『古事記』には記されない国名や地名が多く用いられる。渋川『古事記断』が記された「明治四十三年」（一九一〇）という時代の社会情勢が色濃く反映されている。特に朝鮮半島への強い関心が、国引き神話を取り込ませている。

「明治四十三年」（一九一〇）という時代の理解が『古事記』の内容を省かせてもいる。『古事記』は、イザナキとイザナミがオノゴロ島マに降り立ち結婚する場面を、

其の島に天降り坐して、天の御柱を見立て、八尋殿を見立てき。是

に、其の妹伊邪那美命を問ひて曰ひしく、「汝が身は、如何にか成れる」といひしに、答へて白ししく、「吾が身は、成り成りて成りて合はぬ処一処在り」とまをしき。爾くして、伊邪那岐命の詔ひしく、「我が身は、成り成りて成り余れる処一処あり。故、此の吾が身の成り余れる処を以て、汝が身の成り合はぬ処を刺し塞ぎて、国土を生み成さむと以為ふ。生むは、奈何に」とのりたまひしに、伊邪那美命の答へて曰ひしく、「然、善し」といひき。爾くして、伊邪那岐命の詔ひしく、

「然らば、吾と汝と、是の天の御柱を歩き廻り逢ひて、みとのまぐはひを為む」とのりたまひき（以下略）。

と記すが、渋川『古事記断』は、

伊弉諾命は女神を顧みて、

『此で先づ／＼足拠は出来た、これから国を作らう』と喜ばせられると伊邪那美命も莞爾に打微笑んでうなづかれる。

島の中央に天の御柱といふ柱を立て、八尋殿といふ大きな宮を建て、茲に始めて夫婦の道を行って、睦まじく両個お暮らしなされた。

とのみ記す。『古事記』の原文と訓読を記す渋川『三体古事記』の訳文は更に短く「両神は、此処で天の御柱を廻つて、夫婦の道を始め、国土を生まうと、申合はされ」と記している。詳しく訳すべき内容ではないとの判断が機能する。

児童文学として再話される日本の神話は、文献に記されるままに伝えるのではなく、再話される時代と社会の理解に合わせて再生産されてゆくところに様々な変化が生じている。

注

(1) 渋川 玄耳（しぶかわげんじ）

本名、渋川柳次郎。ほかに藪野棕十（やぶのむくじゅう）名を用いる。一八七二年〔明治五〕〜一九二六年〔大正十五〕佐賀県出身。ジャーナリスト、随筆家、俳人。

(2) 市瀬雅之「児童文学として再話された『日本神話』の戦前と戦後——大木雄二の作品比較を一例として——」二〇二二年〔令和四〕三月

『梅花女子大学文化表現学部紀要』十八号

市瀬雅之「『日本童話宝玉集』に再話された日本の神話」二〇二四年〔令和六〕三月『梅花児童文学』三十一号等

(3) 本稿は、一九二〇年〔大正九〕本をテキストにしている。

渋川玄耳には渋川『古事記噺』の他にも、渋川玄耳説明・名取春僊編絵の『古事記絵ばなし 日本の神様』（一九一一年〔明治四十四〕年子宝倶楽部）の刊行が認められる。

(4) 「素戔鳴」の表記は「尊」と「命」を併用するが、「子生み競争」以後は「命」に統一されている。「くりごと」一に記されるように「稿本の一部を出版」したことによるためであろうか。

(5) 本稿では、植垣節也校注・訳『風土記』（一九九七年〔平成九〕一〇月小学館）の「参考」をテキストにしている。

(6) 原文を「都牟羽之大刀」と記すと「ツムハノタチ」と読む。

(7) イザナミの神去りにおいては、

男神伊弉諾尊は遂に孤独とならせられた。折角天神の命を受けて此大日本帝国を修り固め、夫婦揃うて幾久しく助け合はうと契らせられたのに、思ひ掛なく此不幸が起つた。

と、イザナキとイザナミが生み出した国を「大日本帝国」と表現している。

本稿が引用する『古事記』は、山口佳紀 神野志隆光 校注・訳者 新編日本古典文学全集『古事記』（一九九七年 小学館）をテキストにしている。『日本書紀』は、小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注・訳 新編日本古典文学全集『日本書紀①』（一九九四年四月 小学館）をテキストに用いている。いずれも再話と比較しやすいように訓読文を使用した。